
三日間の恋

砂鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三日間の恋

【Zコード】

Z9977C

【作者名】

砂鈴

【あらすじ】

恋に落ちるのに時間なんて必要ない。隣にいて欲しい人がいる。
それでいいじゃないか。

俺、みき三木大和やまとは今日、恋に落ちた。

*

俺は、はつきり言うと王手する。

嫌味な奴だとと思って、愛想を尽かさないでくれよ。

俺は女には愛されたが、愛したことはなかった。

本気で一人の人を愛したことがないのだ。

そして、これからもこの俺の愛するという気持ちは沸かないだろうとさえ思っていたのだ。

しかし、この気持ちはなんだろうか？

君をこの手で抱きしめたくてたまらない。

君の手を握りたい。

君とずっと一緒にいたい。

こんなに俺を本気にさせた君が悪いんだから・・・。

*

俺は今日も女の子達と喋りながら登校してきた。

そして、俺は一時間目が始まるまで女の子とずっと喋っていた。

これが俺の毎日。

変わることのない日常だったのだ。

君と出会つまでは・・・。

この日の二時間目は体育だった。

男子達がバスケで、女子達がバレーだった。

俺は基本的にスポーツはなんだろうと得意である。

なので、今日も俺は活躍していた。

そんな時に思わず攻撃が俺の後頭部に入ったのだ。
俺は倒れながら、後ろを向くと女子達のバレー ボールが俺の後頭部に当たったのだということが分かった。

そして、俺の意識はなくなつた・・・。

*

俺が目覚めるとそこは保健室だった。

俺は保健室のベットに寝かされていたのだ。

保健の先生はいないようだ。

時間はちょうど六時間目の最中である。

俺はかすかな音が聞こえたような気がして、動きを止める。

「スウ、スウ」

それは確かに寝息だった。

カーテンで閉ざされている向こうのベットに誰か寝ているらしい。

俺は何となくカーテンを開く。

悪いかな、とは思ったが俺は気になるとじつけないのもなくなるのだ。

だ。

俺は目を見張つた。

そこには、肩までを布団に掛けている女の子。

細い黒髪を後ろで束ねている。

そして、スツと通つた鼻。

真っ赤な唇。

マツゲは長い。（目が見れないのが残念だ）

俺は、不覚にも見惚れてしまった。

いつまで俺は眺めていたんだろう。

気が付くともう放課後になろうとしている所だった。

俺は少し残念だったがカーテンを閉め、出て行こうとする。するとその時保健室のドアが勢い良く開かれ、数人の女の子達が流れ込んでくる。

「あっ、ごめんね。大和君。痛くない？」

一人の女の子がそう訊く。

おそらくこの子が俺の頭にぶつけた子なのだろう。

「大丈夫だよ。だから、そんな顔しないでよ」

俺はいつも通りの作った笑顔を彼女達に向ける。

そう、俺はまだ気付いていなかつた。

俺が恋に落ちていることに・・・。

今朝の俺の気分は最低だ。

昨夜はある保健室の子が気になつて、なかなか眠れなかつたのだ。
遠足前の小学生みたいつて言つなよ。

なんたつて、俺の初めての恋なんだからさ。

しかし、名も分からぬ君がとても恋しい。

学年も分からぬ君が恋しいんだ。

今日の俺は授業中も女の子達と喋つっていても上の空だった。
しかし、俺の変化に気付く者はいない。

俺を本氣で愛してくれている奴なんていないということなのだ。
皆、カツコイイ彼氏としての俺を求めているのだ。

外見が良ければ俺が喋らなくても良いということなのだろう。
そんなことを思つていると皆がガタガタと椅子を立ち上がり、服
を着替える。

今日も体育があるらしい。

*

今日は雨が降つてゐる。

よつて、昨日に続き体育館で、男子はバスケと女子はバレーであ
る。

今日も俺は活躍している。

この流れは昨日と同じと思つてゐるとい

『パシー』

「避けて」

アタックの音と、避けてといつ悲鳴に近い声。

俺は何事かと振り向いてしまった。

そして、今日は顔面に激突した。

勿論意識などありません。

*

俺が目が覚めると昨日と同じベットに横たわっていた。
そして、昨日と同じようにカーテン越しに、

「スウ、スウ」

俺は迷いなく、カーテンを開ける。

そこには間違いなく、昨日と同じ女の子が寝ていた。

俺はしばらく見惚れていたが、ふと、触れてみたくなり、彼女の顔に手を近づける。

おそるおそる手を近づけ、正に触れようとしていた俺の手を掴む手。

その人は保健の先生だった。

「何をするつもりだつたのかなあ」

そう意地悪く言つ、保健の先生。

俺は慌てて、保健室から逃げ出した。

*

教室に戻るとまた、昨日と同じ女の子が謝りにきた。

そして、これまた昨日と同じように作り物の笑顔を向ける。

「気にしなくて良いよ。だから、そんな顔しないでね」

そう俺が言うと彼女はキヤツと黙りこぼつ。

しかし、俺の頭の中では昨日より保健室の彼女が大きくなつてい
た。

俺は今日はある決意を持つて学校に来た。
いつもは女の子達と喋りながら登校するのだが、今日は俺、一人である。

授業中も早く終わらないかと時計ばかりを見ていた。
しかし、こういう時に限って時間が経つのが遅く感じる。
じれつたい。

今日の俺に近づく女の子達はいない。
さすがに俺の変化に気付いたようだっ。
今日の俺の計画は放課後に保健室に行つてみることだった。
彼女は昨日も一昨日も保健室にいた。
今日もいるだろうという安易な考え方である。

『キーンコーンカーンコーン』

やけに長く感じた一日が終わった。
俺は早速、保健室へと走り出した。
保健室のドアを開ける。
保健の先生はいいようだ。
問題のベットはカーテンが閉じられている。
俺はゆっくりと近づき、耳を澄ます。

「スウ、スウ」

寝息が聞こえる。
彼女の寝息だと俺はすぐに思い、カーテンを開けると予想通り彼女がいた。

相変わらず、整った顔をしている。

俺はまた見惚れてしまった。

彼女の柔らかい頬に触れてみたくなった。

俺がゆっくりと手を伸ばす。

「柔らかい・・・」

彼女の頬は予想以上にブープーでいつまでも触つていいと思つた。

しかし、少しして彼女の唇に目がいつてしまつた。

俺はゆっくりと顔を寄せていく。

もう少しこうして理性が俺の動きを止める。

しかし、俺はもはや彼女のフルフルの唇のことしか頭になかった。

彼女との距離が後1センチもない所で彼女の目が開かれた。

見詰め合う二人。

彼女があとずさる。

「なあ。俺は君に恋しちまつた・・・。好きだッ」

俺が思い切つて彼女にそう叫ぶ。

すると、彼女は驚いたように目を見開く。

「君はホモなの?」

彼女から発せられた言葉は以外で、彼女の声は以外に低くて、まるで男だった。

ん? 男?

「もしかして・・・君は男なの?」

おやるおやる訊く俺に彼女が出した答えは・・・、

「うんッ。だつて、服だつてスカート穿いてないでしょ」

そんなの言われても俺は知らないよ。君は布団かぶつてましたか
ら。

いつして、俺の淡い恋は三日間の後に終わりを迎えたのだ。
そして、今では彼とは親友である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9977c/>

三日間の恋

2010年11月5日07時34分発行